



近世中後期における村役人制と村運営についてのモノグラフ

—信州高島領乙事村における—

富 善 一 敏

はじめに

近世中後期の村役人についての研究史をごく簡単に整理すると、一九七〇年代までは佐々木潤之介が『幕末社会論』の中で「村落共同体の代表者かつ農民支配機構の末端」と村役人の二重の性格を豪農—半プロ論とのかかわりで定義して以来、幕藩領主の支配機構たる村請制村落におけるその代理者、及びその立場を利用した豪農としての村落支配者と評価する見解が主流をなしていた。研究手法の点でも深谷克己に代表される村方騒動研究が全盛であり、わずかに藪田貫が、株分け村落を中心に近世村落の行財政的性格を論じた際、領主的土地所有の実現過程における村役人の機能・手腕の重要性、村役人特権の規模の小ささに比した行財政機能の大きさの二点を指摘しているにすぎない。^{①②}

一九八〇年代に至り、水本邦彦の「村惣中」論を契機に、村の自律性を前提とし、村民の合意・委任を受けて村政を遂行する村役人という、そのイメージの大きな転換がみられる。水本は寛文・延宝期に確立した農民の〈村〉が、元禄・享保期以降とる分化（家連合）と連合（村連合）の二つの展開方向の中で、村役人を「地域秩序維持者」と位

置付けた。⁽³⁾ 近年では阿部昭が、小前百姓の意志の村政への規定性及び初期からの村役人勤務継続の困難性により、村役人の世襲制から年番制への変化、村役人の非特権化が進むと指摘し、村方騒動を通して村落自治が達成した成果として、村役人給と村役人の数は惣百姓の合意により村法として規定されたことを論じている。⁽⁴⁾ また最近久留島浩は、一八世紀半ば以降村が獲得した行政処理能力（「行政の村請」）を論じる中で、村役人の資質として文書行政への習熟、地域住民の状態を理解した行動、文化的教養の三点を指摘している。⁽⁵⁾

しかしながら、それらの立論の前提となっている村役人のあり方に関する具体的な検討は、必ずしも十分とは言いがたい。上杉允彦は村役人についての研究史整理を行い、「ただ旧来、村役人については、一般的な性格論・機能論を別にする」と、その具体的実態の検討があまりにも少ない」と指摘している。⁽⁶⁾ また筆者が主なフィールドとしている信州についても、松代藩石川村の村役人制とその実態を分析した田中薫の論考など⁽⁷⁾、三の検討があるにすぎない。

本稿では、信州高島領乙事村^{おつこ}を事例として近世中後期の村役人のあり方の検討を行うが、このような研究状況にかんがみて、まず村役人交代の実態・村役人給・村役人入札・領主との関係などの、村役人制のさまざまなファクターをできるだけ明らかにすることを第一の目的とする。その上で、

①村組・講・若者組など、その内部にさまざまな集団を包含する近世村落の特質、及び近世中後期におけるそれらの村政運営上での顕在化という関東村落の一般的動向の中で、村役人を役家筋及び同族団のあり方の問題や、その個別経営との関係に短絡させず、第一義的には村政運営を担う存在としてとらえること

②村の家連合化・百姓の個別経営への専念化という内在的要因及び、村々を徘徊する浪人や各種の宗教者・廻在者などへの対応という当時期特有の外在的要因による、村役人が行う村政運営事務の増大傾向

の二点に留意し、当村の村役人制の特質を考察したい。なお対象とする乙事村（現長野県諏訪郡富士見町乙事区）の

概要については別稿を参照されたい。⁽⁸⁾ また本稿で使用する史料の出典は、特に注記しない限り長野県諏訪郡富士見町乙事区有文書である。

第一章 当村における村役人制の概観

近世初期の村役人制について、左に史料を掲げる。

【史料1】⁽⁹⁾

(前略) 従古定名主ハ五味太郎左衛門之掣善兵衛、同孫ノ善兵衛、同彦ノ宮内左衛門、次ニ又彦ノ九右衛門、次ニ九右衛門兄之七左衛門、次ニ太郎右衛門、右之通り名主ハ五味太郎左衛門子々孫々ニ而仕候、右七代之内神事祭祀名主所ニ而仕候、太郎右衛門名主之節慶安年中ニ上村ニちやうな屋立申候、翌年下之社ニちやうな屋立申候、此節上村ニ而次郎左衛門・源左衛門役人仕申候ニ付、廻り名主ニ罷成候(後略)

延享二年(一七四五)の上村・下村争論の記録の一部であるが、この史料から、慶安年間までの下村の五味太郎左衛門一族の名主役独占(「定名主」)と、その下での神事祭祀執行から、上村・下村別々の「ちやうな(手斧)屋」建造による両社の祭祀分離を契機として、上村の二名の名主役就任による「廻り名主」化が実現したことが分かる。このように、特定の家による世襲名主制から輪番名主制への転換が非常に早いことが注目される。

次に、近世中期の村役人制を示す左の史料を検討したい。

【史料2】(傍線は引用者が付した、以下同じ)

一札

一名主・年寄代り之義、委細ニ書付指上候様被 仰付候ニ付、左ニ書付奉指上候
一 当村之儀、往昔者定名主之様ニ相勤候節茂御座候由申伝候、年寄ハ宅ケ年相勤候内ニ茂無摺相勤りかね候品有之
候得者、御代官様江御訴訟申上候得者御免被下置候与申伝候、然ルニ村談事仕候ハ、名主永く相勤候而ハ人ニ寄
引込等も致、御 上様江御未進等仕、内所不勘定等も有之品ニ候間、重而者御上様江奉願上、名主ハ八月朔日
6 翌年之七月晦日迄宅ケ年宛ニ而年寄江相渡シ、請取候者名主ニ相成り、相渡シ候者ハ年寄ニ相成り候様ニ与、
(得説カ)
其節御上様江奉願上候者、願之通りニ被仰付候与申伝候、尤右奉願上候年数ハ相知不申候、名主・年寄共ニ無摺
品有之候者ハ、五ケ月・七ケ月ニ而茂御訴訟申上候得者、村役御免被下置罷有候御事

一 式拾五年以前酉年郡御奉行様6 御廻状を以被仰付候ハ、名主五ケ年ニ不可過由被 仰付候、尤御廻状ニ茂村談
ニ而五ケ年より内之分ハ不苦趣ニ被仰付候、弥其節も御代官小平新兵衛様江右之品相窺候所、御意ニ成程右之通
り村談事ニ而宅ケ年代リニ相勤候品ハ、此度之被 仰渡江少シ茂相障り不申候、至極宜敷筋ニ候間、此上共ニ右
之通りニ仕候様ニ与被仰付、只今迄罷有候、何卒此上茂只今之通り被 仰付被下置候得ハ難有奉存候、以上

安永六丁酉年八月日

乙事村

年寄

権右衛門

(他年寄3・名主2名連署略)

御代官所様

「定名主」下での年貢未進・「内所不勘定」(経営不振)という弊害のため、藩役所の許可の上、名主役の任期を
八月一日から翌年の七月晦日までの一年間とし、年寄が交代で就任する方式であり(二年未満の退役も可能)、これ

は宝暦三年（一七五三）の名主役出入五年季限定の触（史料7）に違反するものではなく、以後もそのまま続けられた。その時期については、享保二〇年（一七三五）の名主給増額願に「定名主二三年も相勤候得者身上二つかれ候故、役人六人二仕、老年ツ、六番ニ相勤罷有候御事」との記載があることから、この史料の内容は遅くとも享保末年には実施されていたと考えられる。このように、役人六名のうち、名主二名・年寄四名が相互に交代する年番名主制が、当村の村役人制の特徴である。村役人六名による村政の集団運営体制が、近世中期には定着していたことが注目される。

その後、寛政八年（一七九六）には、名主交代及び村役人給に関する次のような村定が作成されている。

【史料3】

村定之事

一 当村之儀、往昔名主役八月朔（口説カ）ニ受取七月晦日ニ相渡来候所、近年段々御高相増シ万端御用向多く、其上今度立場沢上ヶ汐、飯山・大久保・おし込・蟻久保・瀧谷其外汐筋通ニ而畑直・新開被仰付、亦々林検地等ニ而御公用・村用共ニ繁多にて難勤、役替数多にて村方ニ茂甚及困窮候ニ付、当役・古役・組頭相談にて左之通相定申候

一名主役八月朔日（口説カ）と正月晦日迄、二月朔日と七月晦日迄

一 御上様より被下候物者相名主共二月割也

一金貳両・他村地帳紙代・油荏升かん五斗五升・蕎麦升かん四斗、此四品者本名主兩人にて割也

一 縄・俵村より名主へ参候内、春番之名主へ五束・十表遣ス筈也

一 かます者式ツ名主廻りニ致ス筈也

一年寄役者御上様より被下物、外ニ金毫分宛村より、右式品月割也

右之通ニ相定申候、以上

寛政八丙辰年十一月

(名主2名・年寄4名・組頭14名連印略)

このように、第三章で検討する村役人給分の村方独自の増額と共に、本名主の半年交代が定められた。当時の名主の頻繁な交代に対応し、村役人の職務の大半を行う本名主の任期を一年からその半分に短縮したものである。

以上みてきたように、当村の村役人制は村方で自主的に改編がなされてきたが、文政末年に至り領主の介入により大きく変化する。その経緯を示す史料を左に掲げる。

【史料4】¹³

一当村名主役之義、去己丑年迄者六人之内ニ而古キ人へ名主役勤来り候処、同年七月晦日名主権右衛門より年寄甚蔵へ御帳箱譲り候ニ付、先例之通り名主替り之儀 御代官小平加右衛門様へ御窺申上候処、御不審御座候者、其村名主之儀ハ藤右衛門跡役輪助へ申付置候所、輪助不相勤年寄甚蔵相勤候儀不得其意、何方へ被申付候哉其訳可申分御尋ニ候間、当村之儀先々右様仕来候趣申上候得共、郡方掛合之上申付候儀不相用如何ニ哉之段厳敷御尋有之、半言之申訳茂無之ニ付、帰村之上同役へ茂申聞、其上申上度御日延ヲ願、罷帰談候所致方無之ニ付、当役・古役談之上是迄之通ニ而御差置被下置候様再三御詫申上候而、先御内々御聞濟ニ相成相勤候所、翌庚寅五月名主三郎兵衛前ニ而近々甚蔵休役ニ付、此上又候御尋御座候ハ、難渋可仕ニ付、今日当役・古役談之上名主筋通候様申談候、尤役替之向ニ寄四人与式人片寄候儀も可有之候得共、是者僅一ヶ月二ヶ月位之儀ニ候間、違變も有之間敷哉与如此申定候

文政十三庚寅年

名主三郎兵衛前

役人六名のうち古參の者が名主を勤めるといふ従来の方式と、代官の跡役申付とが異なり、その叱責を受けたため、文政一三年（一八三〇）の名主交代から名主筋と年寄筋を分離したものである。領主は新役の者による村政運営を求め、経験者が名主に就任するという村方の主張を否定している。この経緯から、当村の村役人制は、基本的には領主の意向に左右されることが明らかである。⁽¹⁴⁾

また村役人の職務との関係では、従来は役人一名に一筋と、六筋別々に役人の交代を行い、その時期を分散させることにより、職務の円滑な引き継ぎが行われていたと思われる。しかし今回の名主・年寄筋の分離により、「尤役替之向ニ寄四人与式人片寄候儀も可有之候得共」と、役替の時期が重なる場合にはそれがうまくいかず、村政運営に支障をきたす恐れがある。「僅一ヶ月二ヶ月之儀ニ候間違變も有之間敷哉」と一応否定されてはいるものの、この村役人制の変更が村方に不利なことは否定できないと考えられる。

以後明治五年（一八七二）四月、名主・年寄が廃止され、各村に副戸長が一人ずつ設置されるという筑摩県による地方制度の改革まで、当村の村役人制に変化はみられない。⁽¹⁵⁾

第二章 村役人交代の実態と村役人入札

一 村役人交代の実態

表1は、当村の村役人就任者の一覧である。この表から、まず交代の頻度・就任期間について検討する。以後継続

的に人名が判明する元文五年（一七四〇）を起点として、二〇年毎に、五年間のその変化をみると、元文五→延享元年（一七四〇→四四）就任者九名・平均就任年数三・四年、宝暦一〇→明和元年（一七六〇→六四）一〇名・三年、安永九→天明四年（一七八〇→八四）二〇名・一・五年、寛政一二→文化元年（一八〇〇→〇四）三八名・〇・七九年、文政三→七年（一八二〇→二四）三〇名・二年、天保一一→弘化元年（一八四〇→四四）三〇名・一年、万延元→元治元年（一八六〇→六四）三〇名・一年というものである。これから、宝暦年間までは一〇軒程度の家が回り持ちで村役人を勤めたが、安永→寛政年間に村役人就任者の増加がみられ、文化初年にピークに達したこと、しかし文政年間以降は任期が一年間に安定したことが分かる。また前章で述べた文政末年の領主の介入の影響に関しては、天保二年に名主を勤めた重蔵が、同九年には年寄に就任するなど、名主筋・年寄筋双方の就任者に質的差異はみられない。これは領主の介入以後も、名主・年寄が相互に交代する年番名主制という当村の村役人制の特質が、そのまま保持されたことを示している。

次に、村役人就任者の質的变化をみるために作成した表2を検討しよう。表1のうち所持石高及び系譜の変化が追跡できる五三家について、各家の姓、その先祖（慶安元年（一六四八）時の本百姓（三十屋敷）、宗門人別帳の人名、所持石高、農間余業及び村役人就任年代をまとめたものである。この表から、当村における村役人就任者の年次的変化を次の四期に区分した。

①寛延年間以前

No. 1・2・4・6・8・9・12・22・28・34・35・37・49といった特定の家に村役人が独占され、階層的にも五石

以上の上層が大部分を占める。

②宝暦→享和年間

表1 乙事村村役人表

年代 (西暦)	役 人 名					
寛文13 (1673)	太郎右衛門	嘉左衛門	四郎右衛門	市郎右衛門	——	——
延宝 3 (1675)	〃	作右衛門	——	——	——	——
元禄 7 (1694)	善左衛門	伝右衛門	——	——	——	——
宝永 2 (1705)	〃	六 兵 衛	十左衛門	藤右衛門	長 兵 衛	兵左衛門
4 (1707)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
享保 5 (1720)	三郎兵衛	文右衛門	〃	伊左衛門	助左衛門	〃
7 (1722)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9 (1724)	〃	——	——	〃	善左衛門	——
17 (1732)	〃	〃	——	——	——	〃
18 (1733)	〃	〃	彦左衛門	〃	〃	〃
19 (1734)	甚 八	〃	〃	権右衛門	〃	〃
元文元 (1736)	——	〃	〃	——	——	——
3 (1738)	角 兵 衛	——	〃	久右衛門	〃	〃
4 (1739)	——	——	——	〃	〃	——
5 (1740)	三郎兵衛	文右衛門	〃	〃	〃	〃
寛保元 (1741)	〃	〃	〃	〃	甚 兵 衛	〃
2 (1742)	〃	〃	〃	十右衛門	〃	〃
3 (1743)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
延享元 (1744)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
2 (1745)	——	——	——	重右衛門	〃	——
3 (1746)	〃	〃	〃	十右衛門	〃	〃
4 (1747)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
寛延元 (1748)	〃	久右衛門	〃	〃	〃	〃
宝暦元 (1751)	善左衛門	——	——	——	〃	——
2 (1752)	〃	藤右衛門	平 内	平 六	〃	利 平
3 (1753)	〃	〃	〃	〃	十右衛門	利 兵 衛
4 (1754)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5 (1755)	長 兵 衛	久右衛門	兵左衛門	〃	——	〃
6 (1756)	〃	〃	〃	〃	甚 兵 衛	〃
7 (1757)	〃	久左衛門	〃	権右衛門	——	〃
8 (1758)	——	——	——	〃	——	藤右衛門
9 (1759)	〃	三郎兵衛	〃	〃	善右衛門	〃
10 (1760)	伊左衛門	〃	〃	〃	〃	〃
11 (1761)	〃	〃	〃	〃	〃	庄左衛門
12 (1762)	〃	〃	利 兵 衛	〃	〃	〃
13 (1763)	〃	〃	〃	〃	小左衛門	〃
明和元 (1764)	〃	平左衛門	〃	甚 八	彦左衛門	〃
2 (1765)	〃	〃	兵左衛門	〃	〃	半左衛門

年代 (西曆)	役 人 名					
明和 3 (1766)	伊左衛門	重左衛門	兵左衛門	——	彦左衛門	半左衛門
4 (1767)	市左衛門	〃	〃	〃	〃	〃
5 (1768)	三郎兵衛	〃	平 四 郎	平 七 郎	〃	〃
6 (1769)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7 (1770)	〃	伊左衛門	〃	〃	彦右衛門	〃
8 (1771)	〃	〃	〃	〃	彦左衛門	兵左衛門
安永元 (1772)	〃	〃	重右衛門	善左衛門	伝 兵 衛	〃
2 (1773)	平 七 郎	〃	重左衛門	清 七	〃	〃
3 (1774)	〃	〃	〃	〃	〃	長 兵 衛
4 (1775)	平 内	権右衛門	〃	善 七	〃	〃
5 (1776)	伊左衛門	〃	作右衛門	平 七 郎	〃	〃
6 (1777)	重左衛門	弥 七	〃	〃	榮 次 郎	甚 八
7 (1778)	〃	彦左衛門	〃	笹右衛門	源 兵 衛	三郎兵衛
8 (1779)	〃	文右衛門	奥 次 郎	平右衛門	平 内	甚 八
9 (1780)	〃	〃	〃	〃	長 兵 衛	〃
天明元 (1781)	繁 次 郎	権 太 郎	〃	平 七 郎	〃	〃
2 (1782)	伊左衛門	作 兵 衛	平 内	繁右衛門	〃	七郎右衛門
3 (1783)	〃	〃	三郎兵衛	藤右衛門	五右衛門	兵左衛門
4 (1784)	〃	〃	源 兵 衛	〃	作右衛門	〃
5 (1785)	平 内	仙左衛門	平 四 郎	平 七 郎	甚 兵 衛	源 助
6 (1786)	八 十 八	繁右衛門	平右衛門	三郎兵衛	〃	五右衛門
7 (1787)	〃	〃	権 太 郎	〃	〃	〃
8 (1788)	〃	〃	兵左衛門	権右衛門	次右衛門	〃
寛政元 (1789)	源 兵 衛	勝右衛門	作 兵 衛	〃	平 内	庄左衛門
2 (1790)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
3 (1791)	三郎兵衛	治右衛門	元右衛門	久右衛門	甚 兵 衛	藤右衛門
4 (1792)	小左衛門	伊左衛門	甚 八	五左衛門	平右衛門	繁右衛門
5 (1793)	〃	平 内	九右衛門	五右衛門	勝右衛門	藤右衛門
6 (1794)	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7 (1795)	作 兵 衛	孫 三 郎	〃	〃	〃	繁右衛門
8 (1796)	〃	繁右衛門/権右衛門	彦重郎/藤右衛門	五左衛門	元右衛門/伝八	次右衛門
9 (1797)	善左衛門	伊左衛門	藤右衛門	源 兵 衛	伝兵衛/九右衛門	甚 八
10 (1798)	勝右衛門	久右衛門	重左衛門	新 三 郎	五左衛門	〃
11 (1799)	繁右衛門	作 兵 衛	彦左衛門	三郎兵衛	伝 八	元右衛門
12 (1800)	〃	〃	〃	五左衛門	伝右衛門/新三郎	榮 助
享和元 (1801)	甚兵衛/重左衛門	善左衛門	伊左衛門	伝 兵 衛	長 兵 衛	佐次右衛門
2 (1802)	勝右衛門	藤右衛門/重右衛門	彦重郎/和助	慶左衛門	安左衛門	源 兵 衛

年代（西暦）	役 人 名						
享和 3 (1803)	彦左衛門	繁右衛門	甚 兵 衛	新 三 郎	伝八／榮助	源五郎／九右衛門	
文化元 (1804)	清 三 郎	重左衛門／久五郎	作 兵 衛	平内／作右衛門	五左衛門	三郎兵衛	
2 (1805)	勝右衛門	伊左衛門／甚兵衛	佐 兵 衛	伝左衛門／勝藏	次右衛門	安左衛門	
3 (1806)	繁右衛門／作兵衛	甚 兵 衛	善左衛門	長 兵 衛	佐次右衛門	伝 八	
4 (1807)	作 兵 衛	重左衛門／和助	彦左衛門	甚兵衛／甚兵衛	又 五 郎	三郎兵衛	
5 (1808)	清三郎／源八	善 次	甚兵衛／繁右衛門	秋時／甚兵衛	長 兵 衛	平内／綱之助	
6 (1809)	三井伊左衛門	久右衛門	佐兵衛／甚兵衛	次右衛門	三郎兵衛	染 五 郎	
7 (1810)	勝右衛門	繁右衛門	和 助	五左衛門	甚 八	磯 助	
8 (1811)	磯 五 郎	三井伊左衛門	作 兵 衛	兵左衛門	権左衛門	三郎兵衛	
9 (1812)	茂右衛門	善 次	藤右衛門	亦 五 郎	平八／次右衛門	平 内	
10 (1813)	〃	作 兵 衛	甚 兵 衛	嘉左衛門	与五右衛門	安左衛門	
11 (1814)	勝右衛門	〃	繁右衛門	長 兵 衛	市郎左衛門	権左衛門	
12 (1815)	磯 次	善左衛門	重左衛門	三郎兵衛	四郎右衛門	又 五 郎	
13 (1816)	平 七 郎	利 助	三右衛門	兵左衛門	綱 之 助	善 兵 衛	
14 (1817)	善 次	作 兵 衛	茂右衛門	直 兵 衛	長 兵 衛	又 五 郎	
文政元 (1818)	三井伊左衛門	磯 次	繁右衛門	清 七	市郎左衛門	嘉左衛門	
2 (1819)	権右衛門	甚 兵 衛	善左衛門	治右衛門	四郎右衛門	綱 之 助	
3 (1820)	十左衛門	藤左衛門	平 七 郎	平 内	長兵衛／丑五郎	五左衛門	
4 (1821)	作 兵 衛	善 次	弥 吉	善 兵 衛	丑 五 郎	兵左衛門	
5 (1822)	源 次	善左衛門	染右衛門	嘉左衛門	仙左衛門	治右衛門	
6 (1823)	繁右衛門	惣右衛門	利 助	清 七	市郎左衛門	綱 之 助	
7 (1824)	権右衛門	甚 兵 衛	重左衛門	四郎右衛門	長 兵 衛	重右衛門	
8 (1825)	作 兵 衛	鶴 八	平 助	平 内	甚 蔵	易左衛門	
9 (1826)	弥 吉	茂 吉	源 次	治右衛門	三郎兵衛	加左衛門	
10 (1827)	平 七 郎	惣 兵 衛	繁右衛門	楨右衛門	四郎右衛門	市郎左衛門	
11 (1828)	磯次／甚右衛門	権右衛門	重左衛門	伝 之 丞	重右衛門	長 兵 衛	
12 (1829)	藤右衛門	甚 兵 衛	染右衛門	甚 蔵	豊 吉	三郎兵衛	
(名 主 筋)							(年 寄 筋)
天保元 (1830)	甚 蔵	三郎兵衛	輪 助	染右衛門	甚 兵 衛	豊 吉	
2 (1831)	重 蔵	弥 吉	笹右衛門	綱 之 助	平 内	五右衛門	
3 (1832)	権左衛門	安左衛門	藤 七	源四郎／平助	繁右衛門	治右衛門	
4 (1833)	源 次	三井猪左衛門	長 兵 衛	茂 吉	市郎左衛門	伝 之 丞	
5 (1834)	楨右衛門	次郎兵衛	権右衛門	藤右衛門	加 吉	甚 蔵	
6 (1835)	作 兵 衛	甚 兵 衛	三郎兵衛	重左衛門	平右衛門	十右衛門	
7 (1836)	勝 蔵	治右衛門	勝右衛門	弥 吉	鶴 八	佐治右衛門	
8 (1837)	藤右衛門	権右衛門	五右衛門	源 次 郎	平 内	安左衛門	
9 (1838)	三郎兵衛	伝右衛門	源 四 郎	重 蔵	猪左衛門	市郎左衛門	

年代 (西暦)	役 人 名					
天保10 (1839)	繁右衛門	茂 吉	甚 蔵	平 七 郎	源 平	平右衛門
11 (1840)	長 兵 衛	伝 吉	作 兵 衛	甚 兵 衛	治郎兵衛	惣 兵 衛
12 (1841)	藤左衛門	弥 平 治	平 内	勝右衛門	五右衛門	嘉左衛門
13 (1842)	喜 兵 衛	三郎兵衛	重 蔵	三 吉	藤右衛門	仙左衛門
14 (1843)	作 兵 衛	甚 兵 衛	治右衛門	源 四 郎	易左衛門	伝右衛門
弘化元 (1844)	太 蔵	助 蔵	惣 平	忠 兵 衛	源 平	三井猪左衛門
2 (1845)	勝右衛門	重 蔵	伝 吉	藤左衛門	四郎右衛門	儀 兵 衛
3 (1846)	五右衛門	治右衛門	七左衛門	作 兵 衛	弥 助	長 兵 衛
4 (1847)	忠 兵 衛	藤右衛門	豊 吉	源 四 郎	三郎兵衛	九 兵 衛
嘉永元 (1848)	源 平	仙左衛門	太右衛門	権右衛門	勝右衛門	太 蔵
2 (1849)	源 次 郎	弥 助	伝 之 丞	磯 五 郎	吉 五 郎	嘉左衛門
3 (1850)	伝 吉	九右衛門	藤右衛門	孫 助	源 四 郎	甚 蔵
4 (1851)	権右衛門	太右衛門	次右衛門	染右衛門	善 六	長 兵 衛
5 (1852)	三郎兵衛	多 蔵	忠兵衛/源次郎	才右衛門	安 兵 衛	源 平
6 (1853)	磯 五 郎	勝右衛門	藤右衛門	仙左衛門	悦 蔵	四郎右衛門
安政元 (1854)	嘉左衛門	強右衛門	権右衛門	孫 助	惣 平	次右衛門
2 (1855)	作 兵 衛	才右衛門	善右衛門	伝 吉	助 蔵	九右衛門
3 (1856)	長 兵 衛	善 六	安 兵 衛	染右衛門	弥 助	源 兵 衛
4 (1857)	源 次 郎	藤右衛門	太右衛門	平 内	仙左衛門	多 蔵
5 (1858)	悦 蔵	四郎右衛門	勝右衛門	磯 五 郎	孫左衛門	強右衛門
6 (1859)	権右衛門	弥 助	才右衛門	伝 吉	善 六	与五右衛門
万延元 (1860)	治右衛門	九右衛門	善右衛門	藤右衛門	源 次 郎	助 蔵
文久元 (1861)	甚 兵 衛	染右衛門	孫 助	仙左衛門	多 蔵	源 兵 衛
2 (1862)	永 蔵	与五右衛門	磯 五 郎	信 之 丞	繁右衛門	長 兵 衛
3 (1863)	藤右衛門	善右衛門	権右衛門	強右衛門	次右衛門	伝 吉
元治元 (1864)	善 六	源 兵 衛	源 次 郎	藤左衛門	孫左衛門	慶 蔵
慶応元 (1865)	信 之 丞	繁右衛門	作 兵 衛	平 兵 衛	喜右衛門	市郎左衛門
2 (1866)	強右衛門	伝 吉	甚 兵 衛	染右衛門	永 蔵	藤右衛門
3 (1867)	孫左衛門	権右衛門	勝右衛門	善 六	源 兵 衛	与五右衛門
明治元 (1868)	市郎左衛門	慶 蔵	孫 助	源 次 郎	仙左衛門	信 之 丞
2 (1869)	富士左衛門	作 兵 衛	猪 助	治右衛門	次郎兵衛	長 兵 衛
3 (1870)	平 兵 衛	五味与五右衛門	磯 五 郎	繁右衛門	佐久善右衛門	五味七郎右衛門
4 (1871)	小池孫三郎	三井伊助	小池孫兵衛	五味永蔵	五味伝吉	五味伊兵衛
5 (1872)	五味喜右衛門	五味善六	佐久林兵衛	三井信之丞	——	——

寛政7年までは乙事区有文書中の願書・一札類、寛政8年～文政12年は文化12年8月「役人抜替書留帳」、天保元年～明治5年は文政13年5月20日「役人抜替書留帳」(乙事区有文書)による。なお各年の村役人名は年末時点のものであり、/はその年内での交代、——は不明を示す。

No	姓	人 名	慶安元年 三十屋敷	本 分 家 (宗門帳独)	就 任 年 代 (○で示す) 宝明安天寛文文文弘嘉安万文元明治 暦和水明政和化政保化永政延久治治
1	井	文彦	右衛門	門	○
2	三井	右左	衛	門	○
3	三井	五	衛	門	○
4	三井	右右	衛	門	○
5	三井	勝	兵	門	○
6	三井	甚	衛	門	○
7	三井	伊	衛	門	○
8	三井	權	衛	門	○
9	三井	權	衛	門	○
10	三井	權	衛	門	○
11	三井	權	衛	門	○
12	三井	權	衛	門	○
13	三井	權	衛	門	○
14	小池	佐次	兵	衛	○
15	小池	右	衛	衛	○
16	小池	右	衛	衛	○
17	小池	左	衛	衛	○
18	小池	左	衛	衛	○
19	佐久	左	衛	衛	○
20	佐久	右	衛	衛	○
21	佐久	右	衛	衛	○
22	佐久	左	衛	衛	○
23	伊藤	善	衛	衛	○
24	伊藤	善	衛	衛	○
25	五味	平	衛	衛	○
26	五味	九	衛	衛	○
27	五味	強	衛	衛	○
28	五味	長	衛	衛	○
29	五味	平	衛	衛	○
30	五味	兵	衛	衛	○
31	五味	兵	衛	衛	○
32	五味	兵	衛	衛	○
33	五味	兵	衛	衛	○
34	五味	兵	衛	衛	○
35	五味	兵	衛	衛	○
36	五味	兵	衛	衛	○
37	五味	兵	衛	衛	○
38	五味	兵	衛	衛	○
39	五味	兵	衛	衛	○
40	五味	兵	衛	衛	○
41	五味	兵	衛	衛	○
42	五味	兵	衛	衛	○
43	五味	兵	衛	衛	○
44	五味	兵	衛	衛	○
45	五味	兵	衛	衛	○
46	五味	兵	衛	衛	○
47	五味	兵	衛	衛	○
48	五味	兵	衛	衛	○
49	五味	兵	衛	衛	○
50	五味	兵	衛	衛	○
51	五味	兵	衛	衛	○
52	五味	兵	衛	衛	○
53	五味	兵	衛	衛	○

文化6年6月「古代之
*の利左衛門は「文政との記載あり

表2 乙事村村役人兼任者系譜・所持石高・農間余業・就任年代一覧表

No	姓	人 名	慶安元年 三十屋敷	本 分 家 関 係 (宗門帳独立年代)	所 持 石 高 (村持高のみ)								農 間 余 業	村 役 人 就 任 年 代 (○で示す)													
					享保20 (1735)	宝暦4 (1754)	安永4 (1775)	寛政2 (1790)	文化8 (1811)	天保14 (1843)	安政3 (1856)	明治9 (1876)		寛延元 文宝	元禄永 宝永	享元保 文保	寛延保 享延	寛宝延 寛保	安天明 安永	文天明 文永	文天明 文永	弘安天 弘安	嘉安天 嘉安	万安天 万安	元安天 元安	明安天 明安	
1	三井	文彦	右左衛門	次郎左衛門	5.5	5.2	4.9	2.9	1.9	2.0	1.6	—	水車・萱屋上屋・大工・江戸半季稼	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	3.1	9.0	5.2	5.6	3.6	2.1	2.1	4.0	水車・木挽・砂甃	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	1.5	1.7	1.7	3.8	3.1	3.4	水車・中馬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	5.0	8.1	3.5	0.7	3.6	1.1	1.6	1.4	水車・中馬・揚酒屋・酒造	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.4	2.5	2.5	5.5	—	3.9	3.9	3.7	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	8.2	9.3	11.4	14.1	12.5	10.7	6.9	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	6.5	7.4	11.0	10.2	15.2	10.4	8.5	6.8	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	19.8	11.8	13.2	16.5	19.0	3.9	2.4	1.9	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	11.0	19.3	21.9	22.8	21.4	17.9	17.6	8.0	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	5.3	4.3	5.2	6.3	3.2	3.6	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	4.7	4.4	8.3	6.4	4.0	2.9	水車・中馬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	7.5	10.4	11.6	13.8	0.4	0.5	0.4	水車・中馬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	—	—	5.7	5.3	4.5	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	0.3	2.7	3.0	2.3	0.8	2.0	水車・古手商人・中馬・大工・馬喰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	5.1	2.3	1.1	2.8	3.7	4.8	4.7	2.1	中馬・大工・他所稼・馬喰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	0.2	0.1	0.8	2.4	1.8	2.3	2.2	2.8	水車・中馬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	1.9	2.2	3.3	3.3	—	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	0.8	2.0	3.9	—	4.3	5.2	4.6	水車・中馬・木挽	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	3.6	2.0	1.4	1.7	2.9	5.1	6.1	5.6	大工	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	1.1	0.1	0.5	1.0	1.0	3.1	3.5	2.5	鍛冶	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	0.7	1.8	2.4	2.0	2.5	2.2	中馬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	5.4	2.5	0.7	1.8	2.2	1.2	0.6	0.6	中馬・柚	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	0.2	3.1	2.6	3.3	3.3	4.8	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	1.9	2.2	2.3	2.4	1.7	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	10.3	7.1	3.2	5.0	4.6	4.7	水車・油屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.9	0.3	2.5	2.4	3.0	9.6	8.8	5.8	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	—	—	—	3.9	4.3	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	3.1	—	4.5	5.2	6.9	6.9	7.1	4.3	水車・風呂敷背負	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
29	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	1.5	1.9	2.1	2.7	3.2	4.0	4.1	3.7	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	4.2	8.2	9.3	3.3	2.9	2.5	2.6	2.7	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.1	4.6	4.7	2.8	4.2	4.4	3.0	3.1	水車・揚酒屋・店売・萱屋上屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
32	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.4	3.0	3.1	4.4	—	3.5	2.1	1.2	水車・大工・張付師	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	2.3	3.0	4.4	3.2	2.9	萱屋上屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.2	8.3	7.7	7.2	3.5	—	—	—	水車・大工・鉄砲渡世・馬喰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	4.8	5.3	4.4	1.3	4.8	4.7	4.7	—	水車・砂甃	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
36	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	1.4	2.7	2.7	3.0	1.6	2.4	3.2	木挽・油屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	1.3	2.4	1.5	1.8	2.5	1.6	2.5	1.9	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	3.0	3.7	2.9	3.9	3.4	3.9	3.9	3.6	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	3.7	3.9	4.9	4.2	1.8	1.8	—	水車・棒手振商人	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.1	3.1	3.4	4.9	4.5	5.3	4.6	2.7	揚酒屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	2.0	2.3	2.1	3.0	4.2	5.8	5.4	1.1	酒小売	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	0.4	1.7	1.4	1.8	4.4	4.3	4.1	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	0.8	1.1	2.9	6.4	4.3	6.0	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
44	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	2.1	2.6	2.4	4.1	3.9	3.8	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
45	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	3.5	—	5.2	3.7	—	3.4	3.9	3.2	紺屋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	—	—	4.2	4.0	2.8	水車・焼酎取・中馬・大工・鉄砲渡世	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	0.8	2.8	2.7	4.1	3.0	4.0	1.7	1.9	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
48	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	7.4	6.3	5.6	5.2	5.4	5.3	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	11.0	26.4	36.1	39.0	29.1	12.7	11.7	10.8	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	10.7	9.8	6.3	1.3	0.5	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
51	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	1.3	—	9.7	6.9	—	3.9	3.9	3.9	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
52	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	—	—	3.6	4.8	5.3	1.4	水車・中馬	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
53	三井	三井	右左衛門	次郎左衛門	—	—	4.3	4.0	3.8	4.0	—	—	水車	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

文化6年6月「古代之儀御尋ニ付書上帳」、各年の宗門帳・惣高帳(乙事区有文書)、名主書送帳(五味甫家文書)より作成

*の利左衛門は「文政年中6役人相動居候所、明治三年ニ至り当役・古役・組頭相談之上屋順之場江出ス 利左衛門子孫染右衛門・利左衛門ノ式軒」との記載あり

①の分家の者 (No. 11・50・52) をはじめとして、以後も継続的に村役人を勤める家が出現する (No. 5・15・18・26・30・40・44・47・48・51)。所持石高でも上層あるいはそのすぐ下位に位置する。

③文化・天保年間

この時期を最後に村役人を勤めなくなる者が多数みられる (No. 2・12・22・25・29・35・37・50)。その理由は明らかにしないが、No. 2の彦左衛門、12の重左衛門、50の綱之助の如き、当該期の所持石高減少とそれに伴う他の百姓との経済力格差の縮小が、その一因だと思われる。

④弘化年間以降

③とは対照的に、これまで全く村役人を勤めなかった者の就任がみられる (No. 16・18・27・43)。所持高でも No. 43の善六のように、八斗 (安永四年) ↓二石九斗 (文化八年) ↓六石四斗 (天保一四年) と上昇する者が多い。

また農間余業との関連では、全五三名中の六割以上の三四名が水車を所持している一方、No. 2・14・15・31・34・47にみられるように、生計を支えるための複数業種への従事が特徴である。

以上の検討から、近世中期まで村役人は初期以来の有力な役家筋により独占されており、そこから輩出された分家と共に、寛政末年にはひとつの集団が形成されたが (以下これを村役人グループと呼ぶ)、天保・弘化年間以降は、従来村役人を勤めてきた家の衰退及び新興の家の村役人就任により、就任の均等化、すなわち村役人の持ち回り化が進行するとまとめられよう。小前百姓の経済的成長及び上層農民の持高減少による村内の経済的格差の縮小が、その基因をなしたと考えられる。

二 村役人入札

上記のような村役人就任者の質的変化の要因の一つとして、村役人入札について検討しよう。まず、次の二つの史料をみていただきたい。

【史料5】⁽¹⁶⁾

〇〇〇〇〇
年寄入札
入主何右衛門 ^印
何兵衛

入札数十四組ノ七十枚

中折六ツ切壹枚ニ而拾貳枚ニ成六七枚、名主勤之節者名主入札与書申候、入主ハ組頭より五人之名前ヲ五枚江書、銘々印形認メ申候

【史料6】⁽¹⁷⁾ () は割書

名主・年寄役替之時入札之事

一十四組ニ而入札いたし候

〇〇〇〇〇

入主

年寄入札

誰印

誰

中折紙拾貳枚六ツ

切七十二枚豎江三

ツニ折中ニツニ折

一ツねしり

(裏封印)

入札

乙事村

〇 〇 〇

〇 〇

上へ袋へ入候

入札入中にて折

名主入札印形帳

乙事村

一此入札名面と横帳（上書帳也）引合改候而印形可致候（入札ハ疊候而壹升枡之内へ入候、古代より如此）

一退役願、御年季明ケ年其日限前ニ成候節同役へ申出、一同談候上御代官様へ願上候、尤音物差上申候、村入用也

（御音物三百文位、其上懸り候ハ、談ニ可仕候、文化七年申定申候）

一退役被 仰付候とも、跡役不被 仰付内ハ、矢張同様相勤候事也

一後役入札ハ御代官様へ組頭ニ而持參差上申候

一退役被 仰付候御届、郡方様へ廻り申候（御音物）

一出役被 仰付候御届も同断（御音物）

これらの史料から村役人入札の方法についてまとめると、入札数は一四の五人組に各五枚ずつの合計七〇枚であり、交代する者を除く村役人五名が連印した投票用紙に、各組の組頭以下五名が有権者となり、記名・印形の上、希望者の名前を記す。投票後村方で開票が行われ、村役人五名が作成し、有権者全員が連印した「役人入札印形帳」が組頭二名により領主に提出され、領主は一番札・二番札の者のいずれかに跡役を申し付けるといものである。五人組を単位とする記名投票であること、有権者が七〇名に限定され、村内の全ての百姓が選挙権を持つものではないことが特徴である。

次に、有権者の変化について検討する。表3は上村の伊左衛門が属する村内最大の五人組（文化一四年三〇軒、安政四年三七軒）の、寛政三年（一七九二）から慶応二年（一八六六）に至る有権者の変化をまとめたものである。全三二名の有権者を、一で述べた村役人交代の時期区分を参照しつつ、以下の三グループに分類した。

①伊左衛門・権太郎・重左衛門・甚兵衛・権右衛門・藤右衛門・佐兵衛・作兵衛・繁右衛門

寛政末年までに形成された村役人グループに属する。藤右衛門を除き、文政年間以降名前がほとんどみられなくなる。

②孫左衛門・源助・太左衛門・太右衛門・伴右衛門・又兵衛・利助・長助

享和・天保年間に毎年名前がみられ、固定的な有権者である。所持高では、伴右衛門（寛政二年一石二斗、文化八年二石一斗、天保一四年三石、安政三年三石五斗）をはじめ大部分が二・五石の中層に属し、上昇傾向にある。また文化・天保年間には、そのほとんどが組頭を勤めている。幕末期には、孫右衛門（安政五年・元治元年・慶応三年）・太右衛門（嘉永元・四年、安政四年）の如く、村役人に就任するようになる。

表3 村役人有権者の変化(上村伊左衛門組)

年代 人名	寛政			享和			文化			文政			天保			弘化			安政															
	3	7	9	2	3	2	4	5	8	9	11	12	13	14	元	2	3	4	7	8	9	10	11	5	7	8	10	13	15	2	4	7	2	
金左衛門	○	○	○	○																													○	
伊左衛門	○	○		○																														
権太郎	○	○	○	○																													○	
重左衛門	○	○				○	○		○	○																							○	
孫左衛門	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
甚兵衛			○	○	○		○												○															
権右衛門			○								○	○	○																					
藤右衛門				○	○				○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○			○								
源助				○	○	○	○	○	○																				○	○				
佐兵衛				○	○																													
作兵衛				○																														
太左衛門				○											○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									○	
繁右衛門				○																													○	
為之丞						○																												
太右衛門				○	○				○	○	○	○	○	○	○	○										○	○						○	
伴右衛門				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
又兵衛				○	○	○											○	○										○	○					
染右衛門							○																											
利助									○	○										○				○	○		○	○					○	
長助																				○	○	○	○	○					○	○				
孫兵衛																									○	○		○					○	
孫助																											○							
亥兵衛																														○				
慶之丞																															○	○		
金八																																	○	○
広吉																																		○
新二郎																																		○
作十郎																																		○
伊介																																		○
文之助																																		○
久左衛門																																		○

各年の役人入札印形帳(乙事区有文書)より作成。なお享和2・3年は印形帳が複数存在するため、有権者は5名より多い

③孫助・亥兵衛・慶之丞・金八・広吉・新二郎・作十郎・伊介・文之助・久左衛門

天保末年以降新たに有権者になる者である。所持高はまちまちであるが、五石以上の上層はいない。

右の三グループの時期的変化は、村役人グループと組頭を勤める中層農民の両者による有権者の独占状態が、天保末より弘化年間を画期として、それ以外の者が有権者となり、組内の百姓の回り持ち化していくとまとめられる。つまり、選挙権が実質的に組内の全ての百姓に拡大していったことを示しているのである。一で検討した弘化年間以降の従来村役人を勤めない家筋の者の村役人就任は、こうした村内の有権者の質の変化によっても実現されたと考えられよう。

第三章 村役人給

ここでは、領主・村方の双方から支給される当村の村役人給分の年次的変化とその意義について検討する。まず領主からの給分をみると、当初は名主を対象とする肝煎給米五斗二升八合九勺・大豆一石の現物支給と、高掛りの役儀を免除される抜高の制があり、⁽¹⁸⁾名主一五石・年寄七石を上限に適用された。前者は延享四年（一七四七）の本検地施行の際村方からの増給願により、大豆分が二石八斗七升七合七勺に増額された。しかし後者は宝暦三年（一七五三）廃止され、それに相当する分を村方から支給するように改められている。その触書を左に掲げる。

【史料7】⁽¹⁹⁾

一村々名主向後者、中年三ヶ年宛之年季ニ相定、出入五年ニ申付候

附り只今迄名主代り之事、去ル巳之年以前も勤候者、当暮代り可申候、午年も此方名主ニ成候者、夫も五年

目代り可申候、但只今迄ハ村之談ニ而一ケ年代り、二ケ年代り、又ハ三ケ年代り、村談を以定置候分、五ケ年
五内之分ハ定之通可致候

一名主・年寄・歩キ、只今迄高を拔為取候得共、此上ハ拔高不為致、名主ハ拾五石、年寄ハ七石、歩キハ五石分之
歩米、其村々五年之掛り平均して幾津分歩米与相定置、其分其村方も取候様ニ申付候、右之旨百姓方江申聞為
出可申候、依之拔高不為拔候間、御役義相勤可申候

(以下略)

宝曆三癸酉年十二月六日 両 外太夫

中 甚五兵衛

この史料の内容は、

①名主の勤役期間を中三年とし、五年目には交代するが、それ以内の期間の名主交代を定めている村方は従来通りと
する

②名主一五石・年寄七石・歩キ(村定使のこと)五石分の歩米を村方から支給する代りに、従来の拔高を廃止し、村
役人も役義を勤める

の二点である。当村では名主二名・三〇石、年寄四名・二八石、計五八石と、村高の約一三%を占めていた拔高を廃
止することで、百姓の役負担の均等化を図ったものであるが、その代償たる村役人拔高分の歩米支給が村方へ転嫁さ
れたことに注意したい。当村では名主二名に歩米・歩大豆各七斗五升、年寄四名に歩米・歩大豆各一石一斗二升の計
三石七斗四升であり、村方にとっては新たな負担であった。また宝曆五年(一七五五)三月には、「役人水役者不及
申、御借用共二村中ニ而もやい御上納可申候」と、今後とも村役人分の役儀・御借用(追加貢租)を村中で負担する

ことを組頭一四名の連印により村役人へ誓約している。⁽²⁰⁾ 廃止されたはずの抜高は、村方では依然続けられたのである。こうした領主からの給分だけでは多忙な村政事務を遂行できないことから、村方では領主に享保二〇年（一七三五）・延享四年・文化七年（一八一〇）と増給願を繰り返し行い、⁽²¹⁾ 独自の給分支給を村定で取り決めている。その最初は元文元年（一七三六）及び二年である。史料を掲げよう。

【史料8】⁽²²⁾

一 当村名主衆御役米少々ニ付、御上江御願被成候所、村中相談之上内所ニ而大豆只今六斗、先記^(規)と合シ四俵ニ罷成候所ニ相談相済候故、段々役人衆へ御願申御上へ御願之所御延引被成、内所ニ而是悲共^(非)御取被成被下候ハ、年々急度割合ニ而進上可申候、何様成小百姓共、右品少茂相違無御座候、依之判形仕指出シ申候、如此願相済申上ニハ、役人衆^五願ニ而出シ申事ニハ無御座候、然共万^五一御上^五打くずシ之御さ^(五)お有之候ハ、其節御相談ニ而右之大豆何れニも被成可被下候、以上

元文元年

丙辰十月廿四日

御役人中様

徳左衛門[㊦]

(他67名連印略)

組頭 長兵衛[㊦]

(同断13名連印略)

元文元年

丙辰十月廿五日

御願申口上書之覚

(隣)
一憐村米・大豆段々物成過り罷成申ニ付役人方江度々願申、米・大豆共ニ物成壹升ニ付壹錢ツ、年々出シ申候而、
外村分御年具諸色之御せわ被成可被下願申候故、相かない忝存候、如此願之上出シ申上、
(看脱之)
此末何様之小百姓まで迷惑存間敷候、為其印形仕候、以上

元文二丁巳年

閏十一月十三日

次右衛門印

(他78名連印略)

御役人衆中様

史料の前半部の内容は、村中相談の上今後大豆六斗を名主給として「内所」で支給し、その代りに前年(享保二〇年)の村役人給増給願を取り下げることを、「小百姓」・組頭が村役人に誓約するというものである。しかしながら小百姓の連印者数は六八名と、同時期の他の村定に比して非常に少なく、しかも下村に集中していることから、この村定が村内の小百姓全員の合意によるものとは評価しがたい。翌元文二年二月二十九日、「今度村中役人衆・組頭衆・村中御相談相済申候所、下村中平百姓共数度御相談之所ヲやふり可申様ニ申出候、格別之義ニ役人衆御改ニ預り、何共迷惑ニ存付候故わび事仕候所ニ御免被下、何共過分奉存候(中略)此上何事ニて茂村中役人衆之義ハ不及申、組頭中ニて御相談相済申事之分、何にて茂半言之義一切申出間敷候」との一札が、百姓六二名の連印で村役人・組頭に

提出されていることからも、この村定に対する小百姓の不満が存在したことが窺え、ゆえに後半部の条項が再び定められたと考えられる。その内容は、他村への出作百姓七九名が、物成高一升につき一錢ずつを支出し、年貢・夫錢等の世話を委託するというものであり、実質的には村役人増給であつた。

寛政八年（一七九六）には、領主からの給分、年貢上納の際村方から慣習的に現物で支給されていたもの（「油荏升かん」「蕎麦升かん」「大豆納升かん」、元文二年の増給分（「他村地帳紙代」）の名主への配分方法と共に、名主へ金二両、年寄各人へ金一分ずつが、村方から新規に支給されることになった（前掲史料3）。また文化七年三月二十四日には、領主への増給願が実現しなかった場合に備え、出作百姓の物成一升につき錢一文、山手大豆一升につき錢二文を懸けて徴収した錢一二貫三〇七文を本名主二名に等分し、また村内田畑の物成一升につき二文掛けで徴収した錢二貫三九七文のうち金三分を世話役三名に金一分ずつ、金二両を年寄四名に二分ずつ配分し、残りは出物金（名主元臨時入用費）とすることを定めている。⁽²⁶⁾

こうした村方独自の増給は、史料3が「近年段々御高相増シ万端御用向多く（中略）御公用・村用共ニ繁多にて難勤、役替数多にて村方ニ茂甚及困窮候ニ付」と記しているように、当時期の水利体系の整備を契機とした、新田開発の進行による村高増加に伴う、領主・村方両方の事務増大による村役人の頻繁な交代がその原因であつた。⁽²⁷⁾しかし領主からの増給は期待できないため、村が主体的に増給を行い、村役人在任中の生活保障を行つた。次に掲げる史料は、そうした双方の姿勢を明確に示すものである。

【史料9】⁽²⁸⁾

（前略）佐兵衛儀十日斗勤拔候段不埒之儀、左様腰掛勤ニ而折々退役致候故、村方古風も失御上之御用も足兼候間、罷帰談之上宅式々年宛も相勤候様可仕段被仰聞、左ニ申上候ハ、近年御高増家軒等多罷成御用繁勤兼候故、談之上

年寄江年内壹分、名主へ壹兩増候得共、米大豆二而五斗六升切故、別而耆人手間等之者ハ何分勤兼退役仕候段申上候所（中略）御上様二而思召ヲ以被仰付被下置候ハ、難有段申上候所、夫ハ申付ハ安キ事二候得共、談二而随分出候事二候間、村方へ歸古役不殘寄合可談被仰付候、此方二而ハ御上様ニ御増被下度存寄二而申上候得共、御上様二而ハ只久敷勤可申之御申付被下候斗之思召二而被仰下候故、三月廿四日当役・古役・世話役・組頭不殘集相談之上、何卒御上様江増給是非二願上度段ニ申談候、万一御取上無之儀も候ハ、此節ハ左之趣ニ可仕与申談候（後略）

この史料は、文化七年に近村の芋之木村で起きた惣七一件に関して、領主が昨六年六月から七月一〇日までの村

とちのき

(29)

役人の名前を尋ねた際、村側が繁右衛門→佐兵衛→甚兵衛という当時の頻繁な交代のため正確に報告できなかったことについての領主と村との問答である。領主は佐兵衛の如き村役人の頻繁な交代は、「腰掛勤」であり、村方の古風が失われ領主の御用も行えないとして、一、二ケ年は村役人を勤めるよう村側に命じた。しかし村役人は寛政八年に独自の増給を行つても、（年寄）佐兵衛の領主からの給分は米・大豆とも五斗六升にすぎず、「一人手間」の者は村役人を勤めかね退役すると返答し、領主よりの増給を願つたが、領主は「只久敷勤可申之御申付被下候斗之思召」と、それに同意しなかったことが分かる。佐兵衛は文化九年の時点で持高三石・家族数四人と、自分の労働のみで生計を維持しなければならぬことから、文化六年七月一日の年寄役就任後すぐの同月二七日に退役している。⁽³⁰⁾これが彼一人の問題ではないことは、文化二年から同六年までの五年間に四〇名もの村役人の交代がみられることから明白であろう（表1参照）。しかし領主はこうした事態に対し村方の自主性に委ねるのみであり、ゆえに先に述べたような村方独自の増給が実施されたのである。⁽³¹⁾

このように村方からの増給は、村役人在任中の生計保障を目的として行われたが、先に検討した元文元年の事例の

ような小前百姓の反対がみられないことに注意したい。かれらは「御用」「村用」という村としての公共事務を村役人に委託し、自らの私的経営に専念するため、村役人任期の安定化の基盤となるその生計の安定を希望し、自己にとって負担となる増給に同意したのではなからうか。

また、こうした村方からの独自の増給により、経済力の優劣に関係なく村役人を勤めることがある程度可能になる。たとえば弘化三（一八四六）・嘉永二（一八四九）・安政三（一八五六）の各年に村役人を勤めた九兵衛の持高は二石七斗（安政三年）と、⁽³³⁾村内百姓の平均とほとんど変わらない程度である。こうした者にとって村方からの増給は、村役人就任のための必要条件なのであり、第二章で述べた天保・弘化年間以降の村役人就任者の質的変化をもたらした要因の一つと考えられる。

第四章 村役人グループと小前百姓

一 当役・古役体制とその矛盾

ここでは、当役人（現在の村役人）と共に村役人グループを形成していた古役の性格と、当役との関係について検討する。古役とは村役人経験者のことであり、当村においては、宝暦六年（一七五六）正月一三日付の「一札」（不行跡につき託状）に「法隆寺様并古役方・御組頭衆中御頼御託申候得者」とあるのが史料上の初見である。村政上では、同一四年三月九日付の「寺江田地金相渡申筈連判帳」に、法隆寺（村内の寺）に金一三兩一分二朱と田三筆を寄付することを「当役人・古役人・組頭打寄」定め、末尾に「古役人」一〇名の連印がみられる。これから、古役は宝暦年間以降の存在であるといえよう。その人数については、表4から寛政年間以降二十数名であること、また表1

表4 乙事村古役人名表

年代	人 名	人数
宝暦14 (1764)	甚兵衛 文右衛門 久右衛門 権右衛門 善左衛門 長兵衛 兵左衛門 十右衛門隠居 平内 三郎兵衛	10人
寛政11 (1799)	善左衛門 権右衛門 作兵衛 繁右衛門 伊左衛門 藤右衛門 笹右衛門 権太郎 彦十郎 彦左衛門 利八 九右衛門 伝八 五左衛門 伝兵衛 兵左衛門 次右衛門 元右衛門 源兵衛 三郎兵衛 平内	21
文化6 (1809)	善左衛門 作兵衛 佐兵衛 十左衛門 甚兵衛 和助 茂右衛門 勝蔵 清三郎 彦左衛門 九右衛門 伝兵衛 与五右衛門 伝右衛門 兵左衛門 又五郎 利右衛門 安左衛門 甚八 平八 権左衛門 三郎兵衛 平内	23
文政2 (1819)	善左衛門 佐兵衛 十左衛門 甚兵衛 平七郎 伝兵衛 和助 平内 兵 左衛門 権太郎 直左衛門 善次 久右衛門 四郎右衛門 善兵衛 利助 直兵衛 茂右衛門 長兵衛 綱之助 権左衛門	21
天保4 (1833)	利助 繁右衛門 弥吉 藤右衛門 鶴八 加吉 十左衛門 重蔵 磯次 染右衛門 笹右衛門 輪助 源四郎 勝蔵 四郎右衛門 次右衛門 重右 衛門 豊吉 易左衛門 五右衛門 権左衛門 綱之助 三郎兵衛 平内 加左衛門	25
嘉永4 (1851)	三代蔵 惣兵衛 庄右衛門 新次 平之丞 九郎左衛門 文左衛門 清七 平右衛門 彦右衛門 治兵衛 源吉 十右衛門 忠五郎	14
文久元 (1861)	権右衛門 作兵衛 善右衛門 源次郎 藤右衛門 才右衛門 孫左衛門 弥助 磯五郎 甚兵衛 勝右衛門 九右衛門 強右衛門 悦蔵 与五右衛 門 四郎右衛門 伝吉 次右衛門 善六 長兵衛 助蔵 平内	22

乙事区有文書・五味甫家文書より作成

と対照すると、過去一〇年間の村役人に及ぶことが分かる。

次に、古役の職務について述べる。表5は天保一三年（一八四二）二月から七月までの半年間の当役・古役寄合の内容をまとめたものである。五・六月の農繁期を除く四ヶ月間に一三回もの両者の相談が行われ、村方への儉約申渡から、年貢・村入用の勘定といった村役人の通常の職務に至るあらゆる局面で、古役の村政運営への関与がみられる。

また定例の古役の職務については、次の史料をみていただきたい。

【史料10】³⁾

(2月)

徳帳勘定 当役人之内病気差障り、又者新役

或者不吞込者等多有之節者、古役

人之内助役二頼候事

道作

巻日

表5 天保13年(1842)2～7月の当役・古役寄合

月 日	内 容
2. 27	組頭衆願出に付き当役・古役相談、役人の城下への出張代、伝馬・川除人足の歩代半減、揚酒屋当年営業禁止、郷林植林に付き1軒1人出役、上中丸沢橋修復は木橋で行うことを取り決め
3. 6	酉祭礼に付き当役・古役惣代4名出会、神酒は名主が出し、若者頭に金1両を遣すことを取り決め
7	甲州明暗寺役僧以後4年間の穀代料先納の旨申出に付き当役・古役2名相談
15	当役・古役、中丸沢橋掛替、法隆寺世話、村金利息を出物金(名主元臨時入用費)にすること、名主賄金の取り扱い、村方への儉約申渡などに付き相談
28	新組仙八江戸勤入用割、年貢金、下諏訪伝馬出張入用米・同未進米、川除未進米徴収に付き当役・古役4名出会
4. 1	石神宗仙馬傷付一件入用割に付き当役・古役16名出会
6・7	年貢金徴収に付き当役・古役出会
10	年貢・油荏等差引に付き当役・古役5名出会
12・13	徳帳作成に付き当役・古役2名出会
7. 2	歩割(村入用)に付き当役・古役惣代2名出会
7	歩銭割合に付き当役・古役3名出会、歩銭高1石に付き211.4文掛け
16	金子調達のため各軒より生草1駄ずつ徴収に付き当役・古役惣代出会
21	瀬沢村との草刈争論に付き当役・古役22名出会

天保13年2月1日「当座帳」(五味甫家文書)より作成

堰普請

壱日(中略)右者其年之氣候ニ随遲速

有之所、役人多用之節者前達而古役人之内道作為見廻、普請之様見置候事

郷林・郷田境改 古役四人・組頭拾四人 但組頭

替り候節者新役出ル

立場川揚堰浚 其年之依氣候遲速、当月又者三月

上旬ニ可致、前達而役人或者古役

二堰方惣代差添、普請仕方見置候

事

(4月)

一 田場・田水、役人又者古役人・堰惣代折々見廻

り候事

(5月)

一 雷雨等之節人足遣、汐惣代或者当役・古役も参

候

(6月)

一 土用中帳蔵諸帳面虫干 役人六人之内障有之節

ハ古役人差添可申候、

少人数二而取扱中間敷候、古役兩人立合候筈也

(10月)

一歩キ給大豆寄 壹軒貳升壹合 下々ハ辨付有之

寄方古役老人 代六十文

この史料は当村の村役人の勤方を記したものであるが、古役は毎年二月の郷林・郷田と私有地の境の改め(組頭と共同)、六月に当役が行う「帳藏」に収納された文書の虫干し時の立ち会い、一〇月の歩キ給大豆の徴収の職務を担当し、年貢勘定、道普請、堰の普請と浚いの見分などの際、当役に支障が生じた場合その代理を勤めたことが分かる。このように、古役は当役人の村政運営に寄合を通して関与すると共に、多忙な村役人の職務を補完したのである。享和元年(一八〇一)八月には、「役人町往来近年御用多二而難相勤、依之古役人当役人代二頼遣候、是迄平歩同様二相来候得共、此上ハ当役人同様歩召連往来致候筈」と、⁽³⁵⁾多忙な村役人の城下への往来を古役が代替する状況を前提に、今後は古役も当役同様に歩キを召し連れ往来することが定められたことから、それが窺える。

こうした職務の代償として、古役は村役義のうち郷藏の番と近村への飛脚との両者を免除されており、村方独自の公的な役職であった。文政一三年(一八三〇)には、古役の頻繁な寄合に伴う村入用の経費削減を目的として新たに古役惣代を設置し、通常の寄合には惣代のみが出席することを取り決めている。⁽³⁶⁾また、当村の村定の意志決定主体を示す「相談」文言は、寛政年間を境に「村中相談」から「当役・古役・組頭相談」への変化がみられ、当役・古役による村政の共同運営体制の成立を示している。⁽³⁷⁾第二章で検討を行った、宝暦・享和年間に形成された村役人グループは、当役以外の者を古役として村政に参与させることにより、村政運営集団として確立したといえよう。⁽³⁸⁾

しかしながら、こうした当役・古役体制は、対立を内包するものであった。その一端を示す史料を次に掲げる。

【史料11】⁽³⁹⁾

(2月25日条)

(前略) 古役申候者、只今組頭を願出有之候所、諸役義代料引下ゲ、揚酒屋相留候様ニ御相談申度候、先内々伺、其上当役中へ願度候と申

先古役様へ右之段願上候ハ、当役人ハ無之候而も宜敷候、願出者無之内々咄し二候と申、古役藤左衛門内々咄し候ハ、役人印形始メ候所ヲ控居候とハ如何之訳ニ候哉、夫を誠ニこんざつ仕候 (後略)

(翌26日条)

(前略) 仲間組頭衆江申候者其之義ニ者無之、先昨日之様子、古役様之内ニ而何か心ニ有之人御座候よしニ而、名主を歩キ前日ニ壹度、又々兩度遣し候所、漸々昼時を御出被下候方も有之、又朝を御出之人も有、五人組之印形之節平之人並ニ被遣候人も有、尚又表口を御入直ニ仏間江入戸ヲ立居申候

役人不残ニ而廻状持參、古役中様へ申上候者、先達而御役所ニ而被仰候者、当年御柱旁ニ付御省略之品、尚又廻状ヲ茂御覽被下、何卒村内申付之所御相談可被下候と申候得者、藤左衛門殿申候者、内々古役之者ニ而談事仕度義内々承り候義有之ニ付、先御当役ニ而印形御取可被成候と申候、何卒古役様之御取持ニ而、印形是迄之通ニ被成下度候、何分御老人様成共御相代^(惣)ニ而茂宜敷候と申候得者、先御控へ被下候と申故差控候

右種々相嘶候而、何分役人身上之談ニ候得者、談事之義もみたりニ相成候様之義ニ候得者、当役之者勤り兼候間、組頭中ニ願退役仕度候間、先御勘弁可被下候と申返ル (後略)

この史料は天保一三年の名主日記の一部であるが、二月二五日の宗門人別改に際し、名主三郎兵衛は前日に改の助役を古役に依頼したが、古役は「何か心ニ有之人御座候よし」と非協力の態度を取ったこと、当日の改の際にも、当

役は諏訪神社の御柱祭に関する領主の儉約廻状を受け、村方への申し付けについて古役に相談しようとしたが、古役は内々で相談したいことがあると返答し拒否したこと、しかしその相談とは、組頭が当役を通さず古役に直接諸役義賃銭の引き下げと村内の揚酒屋（酒小売業）停止を願ったためであり、それを聞いた当役は、それなら改を再開するのが当然であり、自分たちに控えているとは何事かと、古役と争論に及んだこと、翌二六日当役は組頭を呼び、昨日の一件は村役人としての「身上」（自らの面目）にかかり、以後は勤めかねるとして退役を申し出たことが分かる。この経過から、当役・古役の村役人グループによる村政の集団運営体制は、両者の矛盾・対抗関係が表面化すると機能しなくなるといふ点において、限界を有するといえよう。⁽⁴⁰⁾

二 小前百姓との関係

最後に村役人グループと、小前百姓及びその意向を代表する組頭との関係について、文化九年（一八一二）・天保二年（一八三一）・嘉永四年（一八五二）・同七年の四つの一件について検討したい。まず、文化九年の一件をみよう。この結果作成されたのが、次に掲げる史料である。

【史料12】⁽⁴¹⁾

村中江申渡之事

一 当村之儀者古来より之仕来宜敷、御郡中手本ニも相成候段 御上様より蒙重仰御褒美頂戴仕、村一統何ニ而も役人之差図相背候者咎人も無之所、今度役人差図も不致関屋尾根郷林江手を入伐潰シ、其上道筋等障ニも不相成木坏深伐等いたし、其上様々影言致批判役人ヲ蔑ニいたし、村法乱し一統混雜為致候族有之、依之当役・古役・世話役ニ而組頭并村中江相料候所、不行届不調法至極申訳半言も無之条、御世話役并御両人之御隠居方を以再三御

詫有之候、組頭中之内ニも別段ニ相尋、過怠等も申付候族も有之、猶又平方之中ニも右躰之者可有之候得共、右之旁ニ対し其段差免し候、以来右ニ准シ候義有之候ハ、少も不致用捨候、弥今度相改、古来より仕来之通箇条等永村中和融太平ニ治候様銘々相心得、当役・古役・世話役・被御頼之御隠居方江惣村中ニ組頭江取置候印紙ともニ相添、左之通印形仕差出申候

箇条

- 一 御上様御定式少も相背申間敷候
- 一 御年貢米之手当者冬中ニ致可置事
- 一 御伝馬・諸御役義向大切出情相勤、誰ニ而も其節参候世話人之差図ニ洩申間敷候
- 一 両社氏神者勿論、神社尤致尊敬可申候、穢し又ハ不淨乗打仕間敷候
- 一 役人出役之節、村中一軒耆人ツ、役人宅江参一礼述可申事
- 一 同断退役之節者、一統組頭中斗役人宅江参一礼述可申事
- 一 何事ニよらず願之筋ハ組頭を以可申出候
- 一 一村之内是迄之通乗打仕間敷候
- 一 何事ニよらず農業を離候類之業ハ、幼少之時より不宜敷候、農作第一ニ相心得可申候
- 一 他所稼ニ参候者正月・盆ニ季無間違帰宅、役人江直々廻り届可仕候
- 一 祭見物ニ参候節喧嘩口論・大酒不仕様、猶又衣服等身分ニ応シ可申候
- 一 役人江対し乗打不相成候、小供之時ニ礼義を正し、失礼不仕様親々ニ而教可申候、無駄・我儘親々之教不正之故之事ニ候

右之趣人々相心得、身ヲ治メ家を治候事第一ニ可仕候

一 郷林之落葉ハ売払、代物名主預り置可申筈

一 薬師林・阿弥陀林其外右ニ准候林ハ、後家・やもめ并林無之者ニ為払申候

一人々持林ハ他方一切手差不申候筈

右之通急度相守可申候、已上

申四月十六日

(差出・宛名略)

この史料によると、郷林及び道筋の木の勝手な伐採、村役人への「影言」・批判を小前百姓が行ったのに対し、村役人グループは組頭・小前百姓の尋問を行い、各五人組毎に「御上様御定法并村定之儀少も不相背急度相守可申候」と組頭へ宛てた印形帳を取り、⁽⁴²⁾その上で組頭全員に、今回新たに定めた一五ヶ条を遵守することを誓約させている。なお省略した連印部分によると、この一件の当事者として組頭善兵衛が組頭役水取上、同佐左衛門・浪右衛門の両名が当時取上の制裁を受けている。箇条の内容は、村役人就任・退役時の村中の礼参り(五・六条)、他所稼ぎの者婦村時の村役人への届け(一〇条)、村役人への「乗打」(馬上のままでの通行)禁止(一二条)と、村役人と小前百姓との上下関係を明確に定め、また願ひ事は組頭を通して申し出ること(七条)と、小前―組頭―村役人という意志伝達ルート⁽⁴³⁾の再確認を行い、村内の秩序維持を図ったものである。このように当時期には、組頭・小前百姓に対する村役人グループの統制が、村定という形で発揮され、組頭罷免にみられるように充分な効力をもったのである。

次に、天保二年の一件について検討する。左に当時の役用日記の一部を掲げた。

【史料13】⁽⁴³⁾

六月七日 疱瘡祭

一町五八ツ頃二婦宅

重 藏

笹右衛門

一右兩人御代官様江參上候所、重藏退役被仰付候、跡役入札之儀是迄一向役不勤者江入札仕候様被仰付、又々兩人勘弁仕候処、此上年寄迎も同様二哉、此儀同度申上候所、年寄迎も此上替り次第新役江入札致候様被仰付候趣、兩人婦村咄候二付、昼後二

一古役中江右之訳御咄申候

昼飯後二重藏跡役入札之積二而、組頭中江も其趣觸置候所、右様之訳二付急々組頭中ヲ寄、右之訳咄候所當惑之趣二而、村中小前之者江相談仕度申婦宅、組下江咄候所、何分此上新役斗相頼候而者、村方納兼候様申候二付又々參り、何れ共御役人中右之趣故御一同二御相談御差図被下候様達而申候得共、此度之儀者役人・古役二而如何共発言致兼候二付、種々訳合申候間、組頭中也又々組下江役人之申分ヲ咄シ、小前一同談事致候趣二而、又々夜中參り組頭中申候者、何れ是迄之通り二而相濟候様、御代官様・御郡様江願上度、組頭兩人・小前惣代壹人三人參度候間、何れ御役人御差添御連被下候様申候二付相談仕候所、手越願等者別而此節御触も有之候旁役人無念二相成候而者と存、役人壹人差添參候様申渡候、但シ役人者差添參候而已、願者三人二而委細申上仕候筈二而召連申候

これによると、名主重藏の退役の際領主は「是迄一向役不勤候者」と、名主・年寄共に新役の者への入札を命じ、当役・古役の村役人グループも「如何共発言致兼候」と、それに同調する態度を取った。一方小前百姓は、新役だけでは村方が治りかねると、組頭を通して当役に異議を申し立てたが、村役人グループが同調しないことが明らかになると、「小前一同談事」と独自の寄合を開き、組頭二名・小前惣代一名の計三名による領主への直接訴願を取り決め、

当役にその同行を求めている。新役を就任させるといふ領主と、従来通り経験者が村役人を勤めることを望む小前との対立の中で、村役人を通さない領主への越訴は「無念」として小前に同行するが、その訴えの内容には関知しないという、村役人の主導性の喪失（『傍觀的立場』）と、それに対し独自の寄合を行い意志統一を図るといふ小前百姓の結集が注目される。なおこの訴願は、「其村斗之事ニ無之、御郡中・三千石迄同様之事故、願之通ニ者何分不相成」と、領内一円に同様の申付を行っているとの理由から却下され、表1から分かるように新役の者が就任している。

嘉永四年二月十九日、名主太右衛門の跡役入札が行われ、一番札が伝右衛門、二番札が多蔵という結果であった。村役人グループは当然伝右衛門を名主に決めようとしたが、組頭一同が「何分聞入無之」と難色を示したため、翌二〇日多蔵を跡役にせざるをえなくなっている。⁽⁴⁵⁾この経緯は、当時期には村役人交代の際、組頭及びその背後の小前百姓の意向を無視できなくなったことを示すものである。

最後に、嘉永七年の一件について述べよう。⁽⁴⁶⁾六月二・二三の両日、作兵衛の名主就任に際し、村内の所々に「張紙」がなされた。当役・古役・組頭は三日間の寄合後、七月四日小前百姓全員を法隆寺に招集し犯人の心当たりを尋ね、印形を取ったが、犯人が見付からないことから、名主就任を望む作兵衛の申し出を尊重し、領主の承認を得ている。しかし一九日朝名主宅に「御名主様・御役人中作兵衛ヲひいきにいたしつとめさせ候」と、村役人の処置を非難する張紙が再びなされ、翌日当役全員が古役・組頭に退役を申し出た。これを受け二八日古役・組頭は寄合をもち、「作兵衛殿ニ勤テもらい候者不承知ニ而不残申候」と、作兵衛の名主役就任拒否を取り決めたが、当人は「是非々々勤させ被下候」と譲らず、領主の裁定により、作兵衛が就任することに再度決した。八月一日の役替祝儀（史料12―5条参照）の際、作兵衛の名主就任に異議のないことを記した一札が各組の小前から組頭に提出され、ようやく落着いたのである。⁽⁴⁷⁾このように、作兵衛の名主就任に関する張紙のため当役が退役を表明せざるをえなくなったこと、ま

た名主就任をあくまで求める作兵衛に対し、古役・組頭はそれを止めえなかったことに、従来村役人グループにより維持されてきた村落秩序の動揺と、村内各百姓の個別利害の顕在化をみる事ができよう。

結論と展望

まず、本稿で述べたことを簡単にまとめておきたい。当村の村役人制は、近世中期以降名主二名・年寄四名が相互に交代する年番名主制であり、文政一三年の領主の介入による名主・年寄両筋分離以後も、その実質は変らなかつた。村役人就任者については、延享年間までは旧来からの役家筋が中心であつたが、安永年間をピークとする村内の階層分化の進行による経済的優位性を背景として、その分家が新たに村役人に就任し、寛政末年に至り二〇〜三〇名の村役人グループが形成された。かれらは現在の村役人たる当役と、役人経験者であり当役の職務を補完する古役という集団運営体制を取り、村政運営を行った。小前百姓も村役人に「御用」「村用」という村落の公共事務を委託し、自らの私的経営に専念するために、多忙な村役人の職務に比して領主からの給分が貧弱なことに、村役人の交代が相次ぐ状況の中、村役人任期の安定化の基盤となるその生計保障を希望し、村方独自の増給に同意したのである。

しかしながら、水利体系の整備を契機とした小前百姓の持高増加、五石以上の上層・最上層の者の持高減少により、天保年間以降村内の経済的格差が縮小する。それを背景に、村役人入札の有権者が、村役人グループとそれに次ぐ中層農民（Ⅱ組頭層）による独占から、村内の全ての百姓へと拡大したこと、また村役人給分の増加により、経済力の優劣に関係なく村役人への就任が可能となったことから、弘化年間以降これまで村役人を勤めない家筋の者が村役人に就任するようになる。こうした村役人就任者の質的変化、また村政運営に関する村役人グループ内の当役・古役の

内部矛盾の顕在化に伴い、村役人グループは小前百姓を統制しきれなくなる。小前百姓は独自の利害を持つ自律的な集団として結集し、村役人交代の決定に組頭を通して影響力を及ぼすなど、より深く村政運営に関与し、その規定性を強めていくのである。

次に当村の村役人制の位置付けであるが、村役人グループという形で村政運営自体は、関東・甲信地方に広くみられる長百姓制とはほぼ同一のものと考えられ、また名主・年寄が相互に交代する年番名主制も、大石学が紹介した武州多摩郡坂浜村の月番名主制に類似していることから、突出した豪農が存在せず、また一給の村という限定付きではあるが、関東村落の村役人制及び村落運営のあり方として一般性をもつと考えられる。

最後に、当村における村政の展開の歴史的意義として、近世中後期に顕在化する村内外のさまざまな集団や個々の家の自立化により、それら相互間で発生する多種多様な紛争を調整し、一村としての合意形成を実現しうるような村落運営システムと、それを担う村内職制が形成され、それは百姓身分という近世固有の社会集団が解体した近代に至っても、実態的に継承されたことを展望して、むすびにかえたい。

注

(1) 一九六九年、塙書房。

(2) 「畿内における幕藩制支配と村落の諸特質」一九七四年度歴史学研究大会大会報告別冊特集。

(3) 「近世の村社会と国家」一九八七年、東京大学出版会。

(4) 「近世村落の変質」『日本村落史講座』第七巻、一九九〇

年、雄山閣出版。

(5) 「百姓と村の変質」『岩波講座日本通史 第一五巻近世五』、一九九五年、岩波書店。また神立孝一は武州多摩郡乞田村の名主日記を分析し、村役人が村独自の制度を維持し、領主や他村とのかわりあいの中で合理的な物事の決定方法を選択していたと論じている（『近世の村と村役人

- (一) (二) 八王子市郷土資料館研究紀要「八王子の歴史と文化」八・九、一九九六年。
- (6) 「近世村落論」『日本史研究の新視点』、一九八六年、吉川弘文館。
- (7) 「村役人選出をめぐる藩政と村方の動向」『信濃』三一——一・一二、一九七九年。
- (8) 拙稿「近世中後期の村落と村定—信州高島領乙事村の事例から—」『史料館研究紀要』二七、一九九五年。
- (9) 延享二年「覚書之事」(乙事区作成「乙事諏訪社について上巻」、一九五七年)。
- (10) 上村・下村及び本争論については前掲拙稿を参照された。
- (11) 太郎左衛門は天正一〇年(一五八二)、本能寺の変後の当地域における徳川家康と北条氏直の対陣の際一貫して徳川方を支援したので、家康の江戸入城時に旗本に取り立てられている(「乙骨由緒書」諏訪教育会編『諏訪史料叢書』第三巻、一九八五年復刻、四七二—四四頁)。
- (12) 享保二〇年一月「乍恐奉願口上書之御事」。
- (13) 文政一三年五月二〇日「役人拔替書留帳」前書。
- (14) 高島藩の村役人政策の基本は、村役人就任有資格者を長百姓身分(大前)に限定するものであり、小前百姓は冥加金上納により御目見・苗字帯刀等の格式を得ても、村役人へは就任できなかった(中島佳明「近世中後期村落身分制の再編過程—高島藩長百姓身分の検討—」『信濃』三九—一〇、一九八七年)。
- (15) 翌明治六年には、一四の五人組を一一の日待組に改組し、役場助役として各組より一名ずつ伍長を選ぶことが定められている(同年三月一日「村規則記」)。
- (16) 文政三年三月一日「役人入札印形帳」。
- (17) 『長野県史近世史料編 第三巻諏訪地方』五六八—六九頁。
- (18) 抜高の詳細については、『富士見町史 上巻』(一九九一年、以下『町史』と略す)八八八頁を参照されたい。
- (19) 『長野県史近世史料編 第三巻諏訪地方』五〇四頁。
- (20) 宝暦五年三月「村中願之事」。
- (21) 享保二〇年は注(12)に同じ。延享四年四月二四日「奉願口上書之御事」、文化七年一月「乍恐奉願上候口上書之御事」。
- (22) 元文二年閏一月「隣村出作二付連印帳并村名主給連印」。
- (23) 前掲拙稿。
- (24) 元文二年二月「下分平百姓判形帳」。
- (25) 世話役は文化三年(一八〇六)五月高島藩が設置した村役人とは別に村内の治安維持に当たる者のことである(『町史』一一五二—五五頁)。当村では村役義の一部を免除される村方の公的な役職であり、村役人グループの一員と考えられる。
- (26) 文化七年三月二四日「役人世話役増給談義定帳」。
- (27) その事例として、後年ではあるが天保一三年(一八四二)二月に名主三郎兵衛が行った村政事務を表6にまとめた。

参照されたい。

(28) 注(26)に同じ。

(29) 昨年当村の百姓彦助の所に滞在していた他所者の木挽が、当年芋之木村の惣七方で死去したため領主から咎めを受けたものである。

(30) 佐兵衛の持高は表2(No.14)、家族数は文化九年二月一日「宗門御改并人別帳」(国文学研究資料館史料館所蔵信濃国高島藩領村々宗門人別改帳)、村役人就任期間は文化一二年八月「役人拔替書留帳」による。

(31) 以後も名主就任者の不足という状況は依然として続いており、文政一一年(一八二八)には公用時の名主宅炊事の村役義化、また天保一〇年(一八三九)には村役人・歩きの食事代の村入用からの支出がその対策として取り決められている(文政二年七月「名主所日記」)。

(32) 米崎清実はこの「村用」について、村役人が指示し小前百姓が勤めるべき行政的負担を意味し、近世後期の村社会の変動の中で百姓が主体的に意味付けを行ったものとしている(「近世後期の村社会と「村用」——「家」と「村」と村落行政——「法政史学」四八、一九九六年)。

(33) 安政三年八月「惣高下書帳」。

(34) 年未詳「乙事村万代記」富士見町富士見 五味哲夫家文書。

(35) 享和元年八月一日「会所諸用日記帳」。

(36) 前掲「名主所日記」。

(37) 前掲拙稿。

(38) 領主の側も、寛政三年(一七九二)の儉約触の中で、「於御上是迄方尚嚴敷御儉約被 仰付候条、役人・古役之者共時々令詮義」(寛政三年二月「御借用式割御用捨御儉約被仰付候村中印形帳」と、当役・古役を並列して述べており、古役を当役と同等の者とみなしていたと考えられる。

(39) 天保一三年二月一日「役用日記」富士見町乙事 五味甫家文書。

(40) 天保三年(一八三二)の下村若者組狂言一件の際、当時の名主が「名主役人動居候得者、村方二而色々心得違ひ等数々有之候得共、假令存候而茂成丈知らぬ様ニ致度候、若もとがめねばならぬ様ニ而先方 詫等ニ参り候ハ、先々成丈早く済し候様ニ致候が大[※]一也、当役・古役・組頭大勢寄候而相談仕候へバ中々濟口ニもこまり候間、其時の名主心得大[※]一也」(石神宗平「乙事年代譜」私家版、一九六四年、五味甫家文書)と述懐していることから、それが伺えよう。

(41) 文化九年四月「村中議定印形帳」。

(42) 文化九年四月「村定ニ付当役古役御世話役中江差出し印形帳」。

(43) 天保二年二月一日「台所帳」。

(44) 注(43)に同じ。

(45) 嘉永四年七月一日「当座帳」五味甫家文書。

表6 天保13年(1842)3月、名主三郎兵衛の村政事務

日	事 項
1・2	宗門改入用・水車運上の徴収
3	徳帳入れ、序廻帳持参・代官吉次兵衛無尽に付き相役と相談、年寄藤右衛門高島城下へ行く
4	磯次郎ら4名に道・橋の見分と補修の世話役、立場汐・大久保汐・中丸沢汐の見分を依頼、若者頭より酉の祭に付き願出あり、太兵衛より質地に付き帳面へ下ケ札を願う、伊予国西上村の秩父巡礼1名を正右衛門方へ止宿させる
5	道普請、郷林境・汐浦修箇所などを見分、道普請世話人4名・郷林境改4名・上下組頭中・汐普請世話人4名出る、未進入書き上げ
6	夕方酉の祭に付き寄合、道普請に人が集まらなと世話人より訴えあり、組頭へ明日の立場汐普請には全員集まるよう申し渡す、渡辺丹下他1名私用に名主宅へ止宿
7	上葛木宿より助郷人足8人の触れ当てあり、銭2貫で済ます、甲州乙黒村明暗寺の役僧来村、勸化金を求める、藩の足輕2名臨時の廻村で来る、組頭衆を呼び出し申し渡し、酉の祭りに付き若者頭・古役と寄合
11	年貢の大豆甲府払いに付き廻状、諏訪上社大祝より勸化金上納の廻状、文左衛門に明日上諏訪の町宿に出頭の廻状あり、寄合にて相談
12	文左衛門・同人一類・名主喜兵衛高島城下へ行く、酉の祭、油荳売り出しに付き寄合
13	酉の祭、朝御柱山出し人足の鬨引、大豆附送り駄賃に付き神代村友次郎手代と相談、寄合
14	御林山出し人足8名減の廻状来る、役人代に人足の内を決めるよう頼む
15	寄合、大豆附送り
16	大豆附送り、役人代の者御林山出し人足の帳面を奉行に提出、宿の無心あり
17	野火(山火事)あり、数人で消火、三郎兵衛見分
18	十一面堂祭、年貢金集め、夜御柱山出し人足帰村、人足難儀のため飛脚役に付けるよう世話人より依頼あり
19	氏神神輿拵えを大工三代蔵へ手問賃1両2朱・木代2朱にて頼む
21	奉行赤沼七郎右衛門不幸に付き同家役人より廻状、明日塩沢湯権現の「とのいり」に付き招請の旨机村より飛脚来る、寄合
22	酒屋4名酒の他村売り許可を願う、浪人2名来村、銭48文遣す、年寄三吉・仙左衛門に金1朱を持たせ、塩沢権現へ遣す
23	寄合、屋蔵野沢の樋を拵えた大工に礼
24	年寄嘉左衛門御貸方御蔵へ上新上納のため高島城下へ行き、藩役人に御礼、年寄三吉大武川へ酒買いに行く、酉の祭上村より下村へ入り、近年になく賑う
25	休日、若者頭4名祭礼終了の礼に来る、入用が嵩んだため、若者組への預け金に1分2朱を追加してほしいと願う、組頭より三井文左衛門方にて不用品売り立てを願う
27	瀬沢村より早飛脚来る
28	寄合、年貢金集め
29	年貢金集め
30	寄合、年貢金集め・清算

(46) 以下当一件の出典は、嘉永七年正月「知利塚」(五味甫家文書)による。

(47) なお作兵衛は、安政二年(一八五五)六月まで名主役を勤めている(文政一三年五月二〇日「役人抜替書留帳」)。

(48) 「近世江戸周辺旗本領における村運営―武州多摩郡坂浜村村政の展開―」前掲「日本村落史講座」第五卷所収。

【付記】

本稿は一九九五年六月に東京大学人文社会系研究科に提出した博士学位申請論文(甲)「近世中後期の地域社会と村政―文書管理史の視点から―」の第二章第一節の一部を加筆修正して成稿したものである。史料の閲覧・利用にあたっては富士見研究会・富士見町教育委員会及び史料所蔵者の方々に大変御世話になった。記して謝意を表したい。

なお本稿は平成八年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「近世・近代期の地域社会と村落行政―文書管理史の視点から―」における研究成果の一部である。